

第23回清水町みらい会議要旨

○開催日 令和7年9月26日（金）

○会 場 清水町役場別館会議室

○出席者（委員）

- ・岩崎 清 悟 座 長（静岡ガス株式会社 元取締役会長）
- ・中山 勝 副座長（静岡産業大学特任教授 総合研究所所長）
- ・川村 結里子 委 員（株式会社結屋 代表取締役）
- ・長倉 一 正 委 員（有限会社長倉書店 代表取締役）
- ・三 田 功 委 員（公益財団法人ふじのくに医療城下町推進機構 常務理事）
- ・三船 美也子 委 員（一般社団法人日本親子体操協会 理事）
- ・矢嶋 敏 朗 委 員（日本大学国際関係学部国際総合政策学科 教授）

議題：清水町流「地方創生2.0」を考える ※前回からの続き

- ・ 若者や女性にも選ばれる職場や暮らしの実現に向けて
- ・ 地域資源を活用した高付加価値産業の創出に向けて

■地域資源としての「図書館」「湧水」

- ・ 先進的な図書館を視察して感じたが、“良い図書館が近くにあるなら住みたい”という声が若い母親たちから非常に多い。清水町の図書館も良さはあるが、まだ磨ける余地が大きい。出版文化に触れられる仕掛けや、親子で絵本を楽しめる空間、中高生が安心して過ごせる場など、更に整えるべきだと思う。文科省の補助金も活用しやすく、取り組みやすいテーマではないか。
- ・ 起業支援について、勢いだけで開業してしまう人が多く、最低限の経営知識を学べる環境が必要だと感じている。チャレンジショップも立地が悪いと厳しく、サントムーン柿田川のような集客力のある場所を使う方が合理的だ。Uターン者は地元人脈を使えるため、成功確率も高いと思う。
- ・ 地域資源は、湧水が最大の強みだ。“清水町といえば湧水”というブランドを確立すべきである。サントムーン柿田川周辺の集客力、川端康成が愛した伊豆という“公園”が背後に控える点など、PR材料は多い。水かけ祭りのようなイベン

トで水を浴びながらのダンスパフォーマンスなども楽しそう。町内在住の元ディズニーダンサーとのコラボレーションも面白い。文化的な賑わいづくりにも発展できるのではないかな。

- ・ 地域の文化度を語る上で、図書館や本屋の存在は非常に大きい。平積みの本を見るとその地域の文化レベルが分かるという話は本質を突いている。
- ・ 起業に関しては、住民が気軽に学べる“町民大学”のような仕組みがあると良い。子育て中の女性でも学びながら起業できる。
- ・ 清水町のブランドについては、やはり柿田川湧水を中心に据え、町としての特徴をはっきり打ち出す必要があると考える。

■ブランド力強化の柱は「柿田川」

- ・ 柿田川は町の財産であるのに、現状では“のぞくだけ”で終わってしまい、魅力が十分伝わっていない。水中動画などを活用し、生きた柿田川を見せていくべきだ。川に入りたい人には整備活動に参加してもらい、そういった人たちをどんどん増やしていく。まずは住民自身が「柿田川は財産だ」という認識を持つことが最初で、清水町といえば柿田川、清らかな水、というイメージを創り上げることが重要だ。
- ・ 清水町は道路の結節点であるにもかかわらず渋滞が深刻である。積極的に投資し、改善していく姿勢を見せる必要がある。
- ・ 清水町のブランド力を高めるには、“柿田川”が中心になる。
- ・ 食は有望である。静岡県でもヘルスケアという切り口で健康と食を結び付けた取組を始めている。清水町の場合は、水と健康を絡めた食に関する産業で強みを活かしやすいかもしれない。ふるさと納税の返礼品でも食関連は人気が高い。
- ・ ふるさと納税の返礼品では、うなぎが人気である。柿田川の水を使ったペットボトル製品も好評だが、水利権の扱いは許可権者等の問題があり難しいところがある。

■新しい仕組みで交通基盤の強化を

- ・ 交通に関しては、三島市・裾野市・長泉町と連携してオンデマンド交通を検討しており、サントムーン柿田川をハブにする構想もある。

- ・ 学生の通学、下校、アルバイトなどの移動を考えると、大型バスだけでは不便で、小回りの利く交通手段が必要だと思う。
- ・ 公共交通が減っていくなか、ライドシェアは検討に値する選択肢だと思う。安全性を担保した仕組みを整えれば、動いていない車を活用できる。特に清水町の場合は道路交通しかないなので、真剣に検討していく必要がある。

■女性が活躍し続ける職場づくりのために

- ・ 女性の働き方では、産休・育休明けに「自分の居場所がないのではないか」と不安を抱える人が多い。こういった不安を無くす企業の取組がもっと見える形になれば、働き続けるハードルが下がるはずだ。男性の育休取得も増えてきているので、同様の取組が必要だ。
- ・ 子育ての悩みを相談できるチャットのようなサービスもよい。悩みを傾聴し課題解決をサポートすることで、孤独を感じない環境をつくることができる。
- ・ 一時保育の料金が高く、短時間就労とのバランスが取れないという問題もある。働き続けられる環境の整備が必要だと感じている。
- ・ 女性活躍の取組は企業規模によって差が出やすく、行政が政策的に支える必要がある。
- ・ 女性が働きやすい環境づくりは、総合計画に明確に位置付けるべきだ。

■学生のUターン・Iターン、創業へのチャレンジを応援する

- ・ Uターンで戻ってくる学生に対する補助金支給は県内の他の自治体も取り組んでいる。こういった情報を共有した上で町民に提案型の支援をし、補助金制度をつくっていく仕組みがあれば、的を射た施策になる。
- ・ 創業支援では、サントムーンに家賃補助付きのチャレンジショップがあれば挑戦しやすい。自分のチャレンジに対して応援してもらえることがはっきりわかると踏み出しやすいが、そういった情報が載っているとしても町のホームページは硬い印象が強いので、柔らかい情報発信を期待したい。
- ・ Uターンで就職しようという学生に対して、町独自の補助があるとよい。
- ・ 町民や学生が町内企業を知らない現状がある。企業訪問ツアーなど、地域を知る機会を増やすことが必要だ。

- ・ 三島市のように高速バスにラッピング広告を出すと、大きなPR効果がある。オープンキャンパスで清水町に住むようアピールするなど、清水町でも学生に対して何らか検討できる取組があるのではないかな。

■産官学の連携で、地域資源を生かした新産業創出を

- ・ 学との連携はまちづくりの重要なファクターだ。東部に拠点を作りたい大学もあり、産学連携によるスタートアップが有望だ。千葉県の柏の葉では、健康長寿など明確なテーマのもと、ラボを作って新しい産業を育て、まちづくりを進めている。新しい産業をつくるには、産学官の連携が欠かせない。柏の葉の成功例では、健康長寿や新産業創出といった明確なテーマを掲げてまちづくりを進めている。
- ・ 清水町でも、木村鋳造所やエステックといった先進企業と大学が組めば、ラボの設置などにつながる可能性がある。大規模工場の誘致ではなく、既存の強みを生かす方向が現実的だ。
- ・ エステックを学生と訪問したとき、町民の学生も“こんな企業が町にあるとは知らなかった”という反応だった。親子で参加できる企業見学など、地域の産業を知る機会が必要だ。
- ・ 金融機関の空き店舗を創業支援拠点として活用する例があり、町でも検討できるのではないかな。
- ・ 産学連携では、学生が企画する企業訪問ツアーに町が交通費支援するだけでも十分実現可能だ。若い世代の動きが地域に活気をもたらす。
- ・ 学生主体の取組は少ない予算でも実行できる。行政と協力しながら進めることで、継続的な地域活性化につながる。

■清水町創生の“柱”を見極める

- ・ 清水町の施策は、まず“柱を明確にすること”が重要だ。多方面に手を広げるのではなく、焦点を絞って成果につなげるべきである。
- ・ 今回の議論でも、自然・人材・若者といった資源が十分に活かしていない点が改めて確認できた。町として“核となる柱”を絞り込む必要がある。